

2. スミスの「国富論」第二編、第4編および第5編の主要内容を説明せよ

①生産的労働と不生産的労働：スミスは資本蓄積論の中で生産的労働と不生産的労働を区別して価値を展開している。生産的労働とは具体的なもの（商品）を作り上げその価値を高め、作成者の生活維持費と雇い主の利潤としての価値を高める労働である。一方、不生産的労働とは、家政婦、役人、軍人等のサービス労働であり、価値はそれが実施されて終わった時に消滅してしまう労働である。労働に対する2つの価値を認め、富の唯一の源泉は農業であるとの考え方を改めていった。

生産的労働者の賃金は商品の資本回収であり、利潤や地代の収入は、生産的・不生産的労働者や全く労働しない人に関係なくその扶養に充てられる。

②資本蓄積論：節約と浪費について「資本は節約によって増加し、浪費と不始末によって減少する。」と述べている。収入から消費分を差し引いた残りが貯蓄される。これが資本として生産的労働者を維持するために用いられる。労働者は生産物に利潤を付加して再生産することになる。従って節約をして貯蓄することが資本を増加することになる。一方では、不生産的労働者は雇用され、労働はするが付加価値をつけることはできなく、消費するだけである。その結果、生産的労働者が多いほど国は富み、浪費特に公的浪費は資本を最大に減らすものである。

③重商主義批判：重商主義とは一般に「富とは金銀という貨幣」ととらえ、金銀が増える輸出入は奨励し減る貿易は制限するという主義である。重商主義政策によると特定の産業のみが独占し、商品の価格高騰や利潤率の引き上げをもたらす、資本と労働とが一定の産業に偏ってしまう。その結果、自然な資源配分を妨げ、資源の蓄積を妨げ、国の富を減少させる。スミスは国の経済政策が輸入制限政策と輸出促進策になることを批判した。

④見えざる手：国の政策によって富を蓄積しようとするのはかえって逆行することになる。政府が経済活動に介入せず、各個人や企業が自分の利益のみを最大にする行動をとることが一国全体から見ると全生産物の価値と社会の収入は最大になるのである。意識して社会の利益を考えて実行する場合よりも自分の利益だけを考えた場合の方が”見えざる手”によって思わぬ目的を達成することができる。従って個人の経済活動に政治が介入することを否定し、自由放任主義の優位性を訴えた。

⑤自由貿易論：スミスは自由貿易主義者であったが、対外的には全くの自由放任主義ではなかった。それは関税と輸出奨励金を認めていた。つまり国内の課税物件と類似した輸入品には同額の関税をかけた。また軍事物資のような国産帆布や火薬などは国防上国内産業を確保するため輸出奨励金を認めていた。自由貿易を推進するために輸入制限を解除するには漸進策をとって慎重に行うべきであると考えていた。

⑥自然的自由の体系：重商主義批判の中でスミスは、政府が優遇政策や抑制政策を行うと特定の利害関係者の意図により多くの迷いが生じ目的を達成することができないとしている。輸入政策とか輸出奨励策などの制度が撤廃されれば自然的自由の体系が自然に確立さ

れる。その中で国家は防衛・司法・一定の公共事業を担当するだけで、国民は完全に自由に経済活動できるものにすべきであるとした。このような自然的自由の体系をイギリスにおいて作り、発展する市民社会にすることが目標であった。

⑦財政論：第5編において財政論を展開している。第1章では経費論を述べ、軍事費、司法費、公共事業、公共施設費について考察している。その特徴は公共分野にも自由競争制度や受益者負担の原理があることである。国家の経費は不生産的なものであり、消費のみを生ずる。国家の役割は、国防、司法・警察、土木事業の3つに限定すべきだと主張する。政府は市場を活発にすべく保護するための最小限の活動にとどめるべきだと考え、その結果、「安上がりの夜警国家」と知られるようになった。第2章では収入論を述べ、課税4原則（公平、確実、便宜、最少徴収）が有名である。自然的自由経済を実現するために障害となるものは政府により除去すべきと主張した。更に、公共事業論の中では教育論も展開し、分業により単純作業だけをするだけで成長しない人間になってしまうことを憂慮している。 (B)